

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

イタリアそろばんの旅①

## \* イタリアでそろばん?? \*

木下 和真

イタリア滞在中のある日、現地でお世話になった日本人の先生とその友だちの日本人女性と一緒に食事をした。

「こちらは木下さんです。イタリアでひと月そろばんを教える活動をされています」

日本語の先生は、私を紹介する。

「そろばん???? イタリアで????」  
女性のみけんにかすかなしわがより、普通でない何かに出くわした時のような表情に変わる。

「今どき、そろばん??それもここイタリアで????」

実際に言葉として発せられることはないが、表情から心の声が聞こえる。

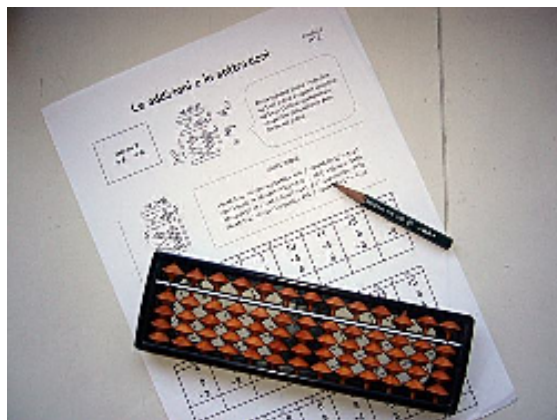
しかし、この女性の反応はいたって健全で、ごく一般的な日本人の反応といえる。実際、仕事を聞かれたときに「そろばんを教えています」と答えると「そろばん?その年で?」と言われることはたびたびだ。(ちなみに私の年齢は30代半ば)その上、「昔はみんな習っていたねえ」と昔話になる。挙句の果てには「今でもそろばん習いたい子はいるのかい?」「教室はやっていけるの?」と私の生活の心配までしてくれる。

なぜ、そろばん? それは私が小さいころから続けてきたことがそろばんだから。

なぜ、イタリア? それはたまたまそろばんに興味を持った私の友人がイタリア人だったから。ただそれだけである。

ただそれだけなのだが、イタリアとそろばんが結び付くと、不思議なことに、予期しなかった化学

反応が起こる。そろばん自体がありふれたもので、ある種の固定観念が染みついた日本とは違い、イタリアの人々は好奇心あふれる表情で、異国から来た不思議な計算道具を見つめる。暗算を披露すると、マジックを見たかのように素直に驚き、感嘆の声を上げる。さらにそろばんを使って「平方根」なんてものを解いたときには自然と拍手まで沸き起こる。陽気な国イタリアならではだ。



【そろばんとテキスト】

こちらとしてはごく当たり前の計算をしているだけなのだが、イタリア人の拍手に乗せられて有頂天になり、「そろばんをやっていてよかった」とまで思える。そして改めて気付く。そろばんも日本の伝統文化の一つだということ。

おまけに、イタリアにはローマ時代に使われていたというローマ算盤というものがある。日本のそろばんと形状がすごく似ているのだが、ローマ時代以降、姿を消してしまったという謎の算盤だ。

イタリアに横たわる数千年の歴史が新たな興味を湧かたてる。



【ヴェローナのアレーナ】

私がそろばんを教えるようになってかなりの年月が経つが、最初の生徒は外国人の男性だった。国籍はタイ。京都の蹴上にある国際交流会館のボランティアそろばんクラスでのことだ。残念ながら、現在は無くなってしまったが、そこでの活動を八年間続けた。外国の人にそろばんを教えることで、世界中にたくさんの友人をつくることができた。その中の一人が、今回の活動の協力者であるイタリア人のコラード・マラストーニさんだ。コラードさんは、イタリアの名門パドヴァ大学の数学者。京都大学数理解析研究所という、日本屈指の数学研究所に研究員として何度も来日しているバリの数学者だ。

勘違いされては困るのだが、私自身は数学者ではない。そろばんを教えているからと言って、数学ができるわけでもない。だから、コラードさんを数学者と紹介することはできても、そこから先は何も言えない。コラードさんに聞いてはみたが、何もわからなかった。一度、学会で発表するための資料を見せてもらったことがあるが、見たこともない記号があれやこれやと並んでいる。数字などまるでない。「アレルギーを起こす」とまではいれないが、一目見ただけで、「ありがとう」と言って返すのが関の山だった。

そんなコラードさんだが、そろばん教室では私の生徒となる。数学者だけあって理解は速い。数回の授業でかけ算・わり算まですべて済んでしまい、その後は、「平方根はどう解くのですか？ 立方根はどう解くのですか？」という話になる。

数学者がそろばんに興味を持つことは不思議なことではない。このボランティアクラスにそろばんを習いに来る人たちの中には数学者や教育学

者、学校の先生が多いのは確かだ。

けれど、私自身も、ごく普通の日本人と同じように、「なぜ、そろばん？」と思うこともある。数学者にとってはそろばんなんて子供のおもちゃみたいなものでしかないように思えたからだ。だから、聞いてみた。答えはこうだった。

「私には子供のような好奇心があります」

日本語以外で話したことがないくらいコラードさんは日本語がペラペラだ。そして、その日本語には特徴がある。短く、端的、そのものズバリ。まるで数式のようなだ。

そんなコラードさんと私は十年以上の付き合いがある。三年前の来日の際、私が国際交流基金の事業で、海外で日本文化を紹介する事業に助成金が出ることを告げた。

「本当ですか？ 資料を見せてください」

コラードさんの反応は予想以上だった。

「どのくらいの期間活動ができますか？」

「いつまでに書類を出す必要がありますか？」  
立て続けに質問が続く。

「最大一か月の活動と書いてあります」

「締め切りまで、あと半年あります」

資料を見ながら私は返事をする。

後から聞いた話だが、コラードさんの頭の中には母国イタリアの子どもたちにそろばんを学ぶ経験を与えたいという思いがずっとあったらしい。しかし、思いつきや希望段階の話は一切口にしないのがコラードさんだ。いままでそんな話は一度も聞いたことがなかった。



【ヴェローナのスカリージェロ橋】

そして、最後の質問はこうだった。

「あなたはイタリアでそろばんをしたいですか？」

言葉上は「したいですか?」と希望を問うているが、質問の本質は「する」のか「しない」のかを問うている。ここで私が「したい」と答えることは、どんなことがあっても実行することを意味する。一度「やりましょう」となると、必ず実行するのもコラードさんだ。

期間は助成がもらえる最大の一か月。自らのそろばん教室を持っている私には、決して短い期間ではない。様々な解決すべき項目が頭に浮かぶ。

しかし、ここであれやこれや私の状況を述べたものなら、この計画はゼロに帰すだけだ。相手は数学者、この問題を解くのか解かないのか、答えはどちらかだ。

少し間をおいてから、

「したいです」

と答えた。



「では、しましょう。私はイタリアに帰るとイタリアの学校の先生に話をします。そこで、そろばんとはどういうもののかの動画を見せます。今度あなたがそろばんと暗算をしているところを動画に撮ります。いいですか?」

イエスと答えると、数式が展開されていくかのよう、これから行われるべき項目が並べられる。

「いいです」私は答える。もう後には戻れない。あらためて悟る。

そもそも助成金は出るのだろうか?? 助成金の申請にはイタリアからの招待状や国内関係団体の後援など様々な書類が必要である。すべて整えた後で「助成が出ませんでした、中止です」なんてことはそう簡単にできるものではない。助成が出なければすべて自己負担になる。イタリアまでの航空運賃、一か月の宿泊費、食費…… 中途半端な額ではない。

その間の授業はどうしよう? 生徒はどうしよう? 一か月にわたり、教室を休むわけにはいかない。そろばんは日々の練習が大切だ。一週間休んだだけで、指が動かなくなる。基本を学んでいる生徒なら、一週間で前のことを忘れてしまう。そうなれば私がイタリアに行っている期間手伝ってくれる先生が必要だ。代行の先生を頼めばもちろんお給料も必要になる。これまた出費だ……。

しかし、考えたところで始まるわけではない。「したいです」と答えた以上、コラードさんの頭の中では、これから行われるべき段取りがもう走り出している。

もう後には戻れないのだ。私も、目の前に横たわるすべての問題を解決すべく、自分自身の数式を展開していくしかないのだった。

(当館語学受講生)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA  
Publicazione mensile in lingua italiana per italiani in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

## RiITALIA -イタリア再発見-

### 第4回『議論するということ』

国司 航佑

よく、日本人は議論が苦手だと言われる。本当なのだろうか。

筆者は、ナポリに生活しながら、自分がいかに議論下手なのか日々思い知らされている。例えば、時折、哲学研究所や歴史学研究所といったところで催される若手研究者の集いに参加するのだが、そういう場では決ってうまく議論に参加できない。こういうことを言おうかなと一寸考えてみても、知識不足からくる勘違いだったら恥ずかしいとか、仮に自分が今議論されていることを理解していなかったとしたらこの発言は浮いてしまうとか、余計な思惑が頭によぎって躊躇ってしまう。そうしているうちに、いつの間にか次の話題が始まっていたりする。たまに、優しい(?)先生が自分に話を振ってくれたりすることもあるのだが、そういう時に限ってこちらは何も考えていなかったりする。あーとかうーとか唸りながら、二の句が継げずに困り果ててしまうことになるのである。

一方、そこにいるイタリア人(イタリア全国から集まった優秀な若手研究者とされる)は、一人残らず全員しゃべる。みな、見事なレトリックを駆使しながら、競い合って発言する。そしてそれは、イタリア人に限ったことではない。大勢のイタリア人に囲まれながら、フランス人やドイツ人も(イタリア語で)立派に議論に参加するのである。そんな時、私はひとり傍観者となってしまうわけだが、注意して議論の展開を追ってみると、どうやら皆が的確な発言を行っているわけではないらしいということに気付く。特に、そういう所に割って入る外国人は、無知を曝け出すような質問を平然としてのけることがある。それを聞いて、ああならば自分が言っておけばと思ったりするのだが、その頃には議論はもうそこに留まってはいないのが常である。

こういう経験をしている在伊日本人は、おそらく

筆者だけではないと思う。そこで、語学力の欠如こそが日本人が議論に向かない理由なのではないか、と考えてみたくなる。たしかに、論題が思想に関するものだったりすると、相当なスピードでのイタリア語脳の回転が要求されるため、やはり普通の日本人だったらまず難しいだろう。しかし、そうではなくても、例えばもっと日常的な会話の場合にも、日本人が議論を先導するという場面はあまり見たことがない。中には、イタリアに長く生活している人間やイタリア語がかなり達者な人もいるのだが、そういう人にしても大勢の前で自らの意見を開陳することが憚れるようである。語学能力はつまり、議論する力に二次的にしか関係していないのではないだろうか。



【議論をする若者たち】

ところで、日本人とイタリア人(ヨーロッパ人)の間には、ものの考え方の違いという障壁が存在しており、その限りにおいて同じ地平に立って議論することがそもそも困難であるという根本的な問題がある。これこそが、日本人が議論を苦手とする(ように見える)最大の理由なのではないだろうか。例えば、先ほど触れた若手研究者の集いにおいて、ドイツの哲学者ヘーゲルに関して論じることがあったのだが、その時これでは私が議論に参加することなど決してできまいと考えさせられるような彼我の違いに遭遇した。議論の途中で気付かされたのであるが、ヘーゲルを考えるということが筆者にとっては遥か昔遠くドイツに生きた偉大な哲学者を研究することであつたのに対して、彼らイタリア人にとっては自分たちの思想の中に受け継がれているアクチュアルな存在を問い直すことを意味していたのである。日本人である限り、どれだけヨーロッパ言語が上手になっても、どれだけヘーゲルに詳しくなっても、自分を育んだ文化のうちにそれを見出すことはできないわけだから、それを自分に関係する切実な問題として捉

えることは不可能だろう。この意味では確かに、価値観の相違が議論を困難にさせているという現実は無視できないだろう。

しかし、ヨーロッパ人が一人、大勢の日本人の中に混じって議論をする場合を考えてみると、価値観の違いを乗り越えての議論も不可能ではないように思えてくる。筆者はいつか、日本人だらけの研究会で一人イタリア人の女性研究者が発表しているところに居合わせたことがある。彼女の日本語は、上手であるけれども、完全というには程遠いものであった。だから、質疑をされたときは恐らくその5割くらいしか理解していなかったに違いない。ところが、彼女はそこで単に質問に答えるばかりでなく、脱線を含みに挟んで、結局質問された時間の3倍以上の時間を使って話したのであった。これは、相互の理解が不十分だったという点において、噛み合わない議論と呼ぶべきものだったかもしれない。だが、議論とは、そもそも異なる意見を戦わせることを意味するものであるから、噛み合うことがその前提にはなっていないはずである。この場合も、多少の誤解や行き違いがあつたけれど、彼女を中心とした議論は、成立していたと言える。こう考えてみると、言語や価値観の相違という障壁以外にも、日本人が議論を不得意とする理由が何かありそうである。

ところで、本連載でも何度か述べてきたように、10年程前、筆者はトレントに留学して一年ほど現地の芸術高校(Istituto d'arte)に通った。そこで、あるとても印象深い議論に遭遇したのだが、そのことは今でも鮮明に覚えている。議論は筆者の所属していたクラスの人間関係にかかわるものであったので、ここでは議論そのものの話をする前にそれに至る経緯を簡単に説明しておく必要がある。クラスには、ある仲良さ女子三人組があつて、その三人(A、B、Cとする)はいつも行動を共にしていた。ある時、Aが3ヶ月の語学留学をするためにアメリカに出発してしまい、残されたBとCは二人きりで自分たちの時間を過ごすことになった。こまではよかった。しかし、アメリカに留学していたAが帰ってきたとき、事件が起きた。BがCにAを仲間外れにしようとそそのかし、Cがそれを拒否したことでBが反対に仲間外れにされたのだ。BはそれまでいつもCのみと行動を共に

していたものだから、それ以降は何を行うにも単独行動になってしまった。さらには、それまでBとCの両者とある程度仲良くしていた他の連中も、Bとは次第に距離を置くようになっていった。筆者はこの一部始終を観察しながら、日本特有のものであると考えていたいじめに似たものがイタリアにも存在していることを知って驚いたものである。



【いじめは日本独特の社会現象として知られる】

Bが独りぼっちになってから1、2ヶ月経った頃だろうか、ある日、特別授業として心理学の授業が行われた。男女間に真の友情は成立しうるかという問題を先生が設定し、授業は始まった。しばらくすると、話し合いはあらぬ方向に向かい始めた。ある生徒(Dとする)が、A、B、Cの間に生じた軋轢について、話し始めたのである。DはAとCに向かって、Bを仲間外れにするのは見るに耐えない、もう止めないかと言いつつ。筆者は、この言動を目の当たりにしてひどく感動した。Dは、クラス全員を前にして、そこに漂う不穏な空気を意に介せず、自分の意見を堂々と表明した。Dにとって、自らの意見は周囲の雰囲気や他人の見解よりよっぽど大事なものであったのである。日本の場合と比較してみるとどうだろうか。人が人を嫌になることは、おそらく人間社会では免れない普遍的な事象なのだろう。多数が少数に対して働く「仲間外れ作り」も、ある種の生理現象なのかもしれない。しかし、そこにいかなる個人意見の表明も見出されないという「いじめ」の構造は、やはり日本特有のものに違いないのである。

恐らく、欧米の家庭では、自分の意見をもつことを、そしてその意見が他のどんなものよりも大事なものだということを教えられながら子供は成長するのであろう。これに対して日本の家庭では、自分の意見をもつ前に他人の意見を聞くことを教えられる。他人に迷惑をかけない子供が、「いい

子」と呼ばれ育つのである。また、この対比を裏返すならば、欧米社会は他人に意見の自由を与えることが各自に義務付けられているのに対し、日本社会では他人が自説を唱えることに対し冷ややかな対応を取ることが許されているという構造が見出されるだろう。こうして考えてみると、筆者には、ヴォルテールが言ったとされるあの有名な言葉が思い出されてくる。「私はあなたの意見に賛同できないだろう。しかし、その意見を述べる権利は、命を掛けて守ってみせる」。日本人が議論をするために必要なのは、まず自分の意見をもつことであり、次にその意見を信じることであり、さらには他人に意見の自由を与えることである(これらを基礎とした上で、知識や話力が加わればなおよい)。

ここまで、筆者は議論することがよいことだという前提で話を進めてきた。しかし時には、ヨーロッパの人間を見て、何もそこまで議論しなくてもよいのに、と思うことがある。議論をしないで済ませる日本の「なあなあ」の文化も、時と場合によっては

いいものである。



【フランス革命の立役者の一人、ヴォルテール】

(元会館スタッフ)

## … 会館 だ よ り …

### イタリア語よもやま話

「単数形に複数形、女性名詞に男性名詞、いくつ覚えてもきりが無い動詞の活用、接続法に条件法、そのうえ山ほどある例外...。こんなイタリア語を間違わずにペラペラしゃべるイタリア人の頭の中はどうなっているの?」、「初対面ならLeiで、親しい間柄ならtuで呼びかけますって習ったけど、どのくらい親しくなったらtuになるの?」。イタリア語を学んでいる方たちの中には、このような疑問を持たれたことのある方もおられることでしょう。こうした疑問にも触れつつ、難しい文法のことはひと時忘れて、イタリア語の勉強がまた楽しくなってしまうような生きたイタリア語のよもやま話をあれこれご紹介します。

講師: 立元 義弘(大阪大学講師、

元パナソニックイタリア社長)

日時: 2/4(土) 17:00~19:00

参加費:

受講生・一般 1,500円

個人維持会員 500円

会場: 日本イタリア京都会館 大阪校

定員: 20名

※「イタリア語よもやま話・フルコースランチつきセミナー(2/26 京都開催)」はおかげさまで満席となりました。お申込み頂きました皆様、誠にありがとうございます。当日をお楽しみに!



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>